

## 現代社会の諸問題と教化

第六分科会は、「現代社会の諸問題と教化」というテーマで、座長に三国正順師（東京西部）、貝山宣昭師（神奈川一部）、問題提議発表者に石田良正師（京都一部）、吉本前教師（山口）、井本学雄師（兵庫西部）、助言者に近江幸正師（東京南部）、伊藤如顕師（三重）、運営に牛居一教師（大阪）、久住謙是師（神奈川一部）、書記に草野弘有師（宮城）、布教研修所研修生の各役員のもとで三十六名が出席して開かれた。

この分科会は、日蓮聖人の信仰をたいして、日蓮聖人の誓願をいかに社会に具体化し、教化してゆくか、直接、現代社会の関わりの中でとらえてゆく。それには社会の現状を正しく認識し、その問題の所在を明らかにし、これに関わり対処する教師の態度、姿勢について検討を加え、あるべき方策を考えてゆこうとするものであった。それは私たちにとって、祖願である立正安国を現代に生かし、同信同行同学の道に精進し、

報恩、誓願、諫晩の立正平和運動を自覚的に進めてゆかなければならぬ討議テーマである。

分科会に先きだち、全体会議での中濃教篤現宗研所長の話、近江幸正現宗研顧問の基調講演は、第六分科会には特に重要な問題提議であった。現代社会の諸問題を挙げ、世界的、国際的広がりを持つ激動の複雑性、一方では地域社会の問題も多様に変化しつつ深刻化している現状に対して、教師はどうとり組むべきかが示された。

さらに分科会の中で、問題提議発表の三師から、それぞれ立場、教化体験から、日蓮聖人が当時の歴史的、社会的状況の中で布教された実践を、現代の社会に即してどう生かしてゆくか、法華経と日蓮聖人の教えの現代化、さらに現代的危機の認識、社会問題と信仰問題の接点、立正安国の理解、社会問題への教師の対応などにわたって所見が発表された。

これを受けて、テーマにもとづく話し合いに入ったのである。

話し合いの内容は、広汎にわたって意見が出されたが、まとめ上、私に整理すれば大きく三点に集約される。

一つは、現代に法華経をどう説くべきか。二つには、現代社会の宗教的把握、認識の問題。三つには、立正安国の祖願を活かす立正平和運動の反省と今後のとりくみである。

第一は、出席者の布教体験の成果が幅広く報告され、さらに話し合いや意見交換として述べられた。

まず、一天四海皆婦妙法とは何か、どんな状況をさすのか。冒頭から大きな命題が出された。日蓮聖人が法華経の精神を損うものと批判した他宗の隆盛をゆるしている事実、四海婦妙が実現できない宗門の現状をとらえ、社会教化の弱体性があげられた。また、とらえ方の一視点として、「同婦妙法」といって、法華経信仰の理想の集団づくりにこだわらず、質的な相違はあっても、通題目の教団を包含した面を評価するといった意見も出た。

しかし、法華経の真理を伝え広める使命、四海婦命の現代的意義を正しくとらえ努力してゆく。理想を忘

れたところに実現は無いという方向で話が進められた。

法華経を現代のことばで説こう。教義、教学の現代化、現代人に通じる論理化、たましいの救済、指導原理としての法華経を知らしめる現代への対応の立ち遅れが指摘され、若い人に親しまれる法華経を広めよう。若者は何かを真摯に求めている。それに応える努力に欠け、置きざりにしている。むしろ新興宗教が求めに  
応えていないかという反省が出された。

また、価値観の多様化、情報過多の中での教師の対応に限界があり、曾っての価値観が放棄され、多様な価値観に流され、人間、社会そのものを説く我々の態度はどうあるべきか。が提議された。

めまぐるしく変転をとげる社会情勢、八十年代に、さらに加速されるであろうことを考えるとき、法門談義以外、世の中的一切われ関せずといった超俗の姿勢は許されない。口を開けば自己矛盾に陥入り、教師の指導性が疑われる。「坊主は何を言っているのか」との声もあり、社会的対応が深刻に迫られている事実が出された。

これに対して、正面的に取り組んでゆこうという見解として、グループ研修の勧め、教研会議などの情報交換、当局の指導強化などの方法論が出され、「御遺

文を読み、おのずから解答が与えられる。「本化の菩薩としての自覚に立った法華経の確固とした把握、変らない宗教的姿勢が逆に求められる。」「唱題の意義を再確認しよう。おのずから道が開かれるものである」などの教師の確信不足を指摘した意見が述べられ、特に、宗門における戦時中における戦争遂行の協力、一転して戦後の平和運動の推進、宗門の本化の菩薩行実践の曖昧さが反省として出されたことは、激動に対応する教師の姿勢がきびしく問われていることの一端を示すものであった。

さらに、現代に法華経をいかに信受し説いてゆくかの問題の展開は、自覚すると否に関わらず現代は人間が人間であることを忘れさせようとしている現状において、それを警鐘して説いたのが法華経の根幹、分量品である。日蓮聖人の立正安国の実践は、正しくその具現の菩薩行に外ならないという理念の確認と、立正安国の実践、菩薩行こそ、日蓮門下の使命であり、現代の社会を救済しうるものである。「菩薩行」に徹することこそ、現代に対応しうる教師像であるとして、種々の教化実働例が報告された。

菩薩行を信頼、愛情、感謝に布えんし生活に即して説く具体例がだされた。たとえ時代がどんなに変って

も人間とは、親子とはの命題は変らない、そこに焦点を合わせた菩薩行。檀家の二代目、三代目の信徒化をめざす。法華経の色読に悦びを感じる。題目に生甲斐を感じる。自行と化他に徹する。檀家を一人ひとり信者にする再教化を実施している。地域における保護師などの社会福祉活動による菩薩行実践など、あらゆる機会をとらえて社会教化にとりくむ姿勢が紹介された。とくに、大切なことは、一人ひとり、生きとし生けるものが、仏の子であるという仏子の自覚を持たせること、不軽菩薩の但行礼拝、合掌する姿、その精神こそ現代に求められているものであり、日青などで進めている少年少女の教化こそ、菩薩行実践の未開拓の分野である。宗務当局のこれらの問題への対応、僧俗への指導強化を強めよ。という意見が出された。

以上の、現代に法華経をどう説くべきか、の話し合いは、現代社会の諸問題をふまえて出されてきた菩薩行実践である。その現代の諸問題が話し合いの中で、さらに深められ、現代の危機として認識されたとき、二つ目の現代社会の宗教的把握、認識の問題となり、当然、三つ目の立正平和運動につなげられるものである。二つ目のまとめは、まず、

現代社会の諸問題に最優先されるべき事柄としては

人類の絶滅、世界滅亡の危機をにおいてありえない。いまや地球上には地球が残りなく破滅し尽しても余りある広島級原子爆弾の百万倍とも二百万倍ともいわれる核爆弾を保有しているといわれる。国亡びれば三宝を仰ぐもの無きが如く、地球が破滅すれば、お題目の何もあり得ない。この現代の危機感を持つことができるかどうか、深刻にとらえうるかどうか、立正安国の祖願に生きようとする者に看過しえない核廃絶、核兵器禁止に向けた立正平和運動の推進が述べられた。

そして、広島原爆犠牲者三十万人、今も被爆者の多くの人々が苦しんでいる。その土地は日蓮宗信徒も多くのいる正信帰依の土地である。法華経の我此土安穩という経文も疑わしく思われるという悲痛なさけびの声が紹介された。人類生存の危機を深刻に受けとめたとき、まず、どのような行動を起すべきか。「檀信徒を増やさなくともよい」、「日蓮宗、お題目が広まればよいとするのではない」など寺のあり方を根本的に考え直す発言が出されたのである。

日蓮聖人が教示された「時」、末法に生きるわれわれの世界、争いによって全人類が滅ぼされる可能性が現実としてある。一人として免れることのできない共業の中に置かれているという認識と共に、

日蓮聖人の立正安国こそが、この時代を救い、うるものである。法華経の寿命品にいう、命が与えられる。命をくださいと説示される教えこそ、すべての人々に求められているものであることを知るべきである。

われわれは、この立場に立つて教えを説き実践しうるかどうか、本当に問う必要があるのではないかと話し合われた。

また、インドシナやアフリカの飢餓、食糧問題や、世界的な石油不足によるエネルギー危機、後進国における人口爆発、地球的規模で進んでいる環境破壊、人間不信に根ざす人間疎外、老人問題、青少年の非行、人種差別、労働問題など世界的な問題として数えられ、反面、身近かな国内問題、地域問題として、まず公害があげられた。洗剤問題は琵琶湖の対策実状が紹介され、環境汚染問題として石油コンビナート工業地四日市市の様子が報告された。さらに産業排棄物、同和問題も注意を促された。そして資源の乏しい貿易立国、海外依存の強い日本の実像の一端が報告された。石油にみられる資源確保の問題はきびしい国際政治、経済のはざ間で不安に覆われている。もし、万一に食糧の輸入が全面ストップしたら、その70%を輸入にしている日本は二カ月で食糧危機に陥入るといわれる。

これらの提議を踏まえて、立正平和運動はいかにあるべきか。核兵器禁止の推進運動と共に、平和運動は観念に終らせない説得力をもつ地についた運動を進めるべきである。目を世界に、そして身近かな国内、地域にも向けた運動、多様化した諸問題に対応した運動の方向をとる意見が出され、かつまた、高度経済成長期に美德とされた資源の乱費は、いまや悪徳と転換した消費観に象徴されるように、資源は有限である。物を大切にする生活意識の変革、人間づくりも平和運動に合わせて進める必要があることも述べられた。

こうした現状の認識、現代社会の諸問題について問題をさぐり、われわれは、これにどう取りくんでゆくのか、具体的にどう対応してゆくのか、話し合いの方向が自然に立正平和運動の実働の問題に焦点がしばられたのである。

三つ目のまとめ、立正平和運動の反省と今後のとりくみが話し合われた。

まず、出席者全員の共通の理解が得られるよう助言者から、立正平和運動の沿革について話された。

昭和二十七年に立正平和運動本部が日蓮宗宗務院に設置発足したこと。折鶴行脚の実施などで広島・長崎の原爆症で苦しむ人びとの支援に成果をあげ、被爆者

援護について日蓮宗が運動化に指導的役割を果たしたこと。イデオロギー対立の中で、立正平和運動も消極的になり形骸化していったこと。わずかに八月十五日の千鳥ヶ淵慰霊法要を公的に行っているにすぎない。現在、立正平和運動は、立正平和の会の会員百五十名ほどが有志の組織として活動している、などが報告された。

これらの説明をもとに、話し合いを進め、出席者の中から、この組織の存在を初めて知った。名は聞いていたが何をしているのかわからなかった。この会は革新政治のお先棒かつぎの風説があり、是正するためのPR不足があるのであるのか。活動をもっと宗門教師に知らせる方策はないか、知らせるべきである。第十回教研で討議されたこの運動に関連した問題を積極的に取りあげてほしかった。立正平和運動本部が日蓮宗宗務院教務部に所属して公的に今もあることを初めて知ったなど、初歩的な理解不足が出席者の中に多くみうけられた。

説明後の質疑応答に、立正平和の会が有志の集りで活動や資金に限界があり、そのためのPR不足により、活動を全宗門的に知らせることがむづかしい現状が説明された。

さらに、話題を進め、この運動にどうとりくむべきかについて意見を出し合った。

核廃絶、核兵器禁止運動、被爆者援護運動が立正平和の会によって強力に進められていることを改めて評価し直し、われわれも主旨を理解し関心を持ってゆく。立正平和の精神を社会的にもアピールし、立正平和運動を強力に推進することを確認した。

その場合、地方の貧乏末端寺院は、わずかな檀家を手手に、その日の生計、食べてゆくことをどうするかというところで精一ぱいである。平和運動は、生活に困らない寺院住職のものが集ってやっているといった印象が強い。われわれの望む平和運動は、末端寺院教師が主旨に賛同し、困難を克服して動かざるを得ないような、動けるよう焦点を合わせた説得力をもった内容の吟味、主旨の徹底したものであってほしい。そうでなければ、宗門全体に輪を広げられない。といった意見や、平和運動の実践は、グローバルな動きと共に、教師一人ひとりのささやかな公害へのとりくみなど菩薩行の仏国土建設につながる活動も報告し合い評価してゆく広がりを持つことも必要といった声も出された。これらの意見の中から、結論として、今後、立正平和運動を具体的に、われわれの問題としてどうとりく

むべきか、具体的な活動について話し合った。

その結果、現在、宗務院教務部内に設置されている立正平和運動の組織を強化し拡大すべきである。さらに、この運動を推進するための研究の場を組織の中につくることを、第六分科会全員で決議した。

そして、われわれ教師が正しく日蓮聖人の立正安国の誓願をみづからの誓願とし、聖人の志をつぐ自覚と実践が必要であることが確認された。立正平和運動を形骸化から蘇生させ、真に「一切衆生同一の苦を受くるは日蓮一人の苦」と仰せられた意味を今日に生かし救済の理念たりうるようにできるかいなか、ひとえにわれわれの運動へのとりくみにかかっていることを確認し合ったのである。

△久住謙是▽